?と!が生まれる自然環境

小川にすむ生き物とかかわることで、子どもたちのなかに集中力や主体性がはぐくまれていきます。その理由は、小川の生き物の非日常性にあるようです。

監修＝大澤 力（東京家政大学教授）

自然を取り込む園庭作り vol.10

小川が培う子どもの育ち

執筆＝内野彰裕（東京都・東京ゆりかご幼稚園園長）

ビオトープ環境としての小川は、生き物や、生き物を介した友達とのかかわりを通して、子どもの発達に広範囲に影響を与えていきます。もちろん、土の上や草はら、林の中でもこうした影響は見られますが、小川がほかの場所と最も異なるのは、生き物に非日常性があることだと思います。日常の生活やあそびのなかで出合うバッタやカマキリ、コオロギ、ミミズ、クモ、アリ、ダンゴムシなどの生き物に比べ、エビやカニ、魚などの小川の生き物には非日常性があり、あえて見つけようとしなければ出合うことはまずありません。「じっと目をこらして見つけようとする」「網を使い、手探りで見つけようとする」。こうした集中力を伴う行動が見られるのが小川の特徴でもあります。

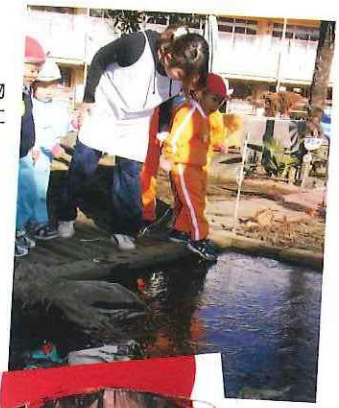
しかし、こうした主体的なかかわりは、初めから見られるのではなく、例えば、5歳児が慣れた手つきで小川で生き物を採取する姿を3〜4歳児のころから目にし、「自分もあんなふうに見つけたい!」という思いを重ねたうえで出てくる姿であるように思います。それが、初めて自分で見つけたときの感動につながるのです。保育者や友達と共有した感動は意欲に変わり、考え、学びながら、生き物を探すようになります。

そして、捕まえた生き物を大切に見守り、観察をし、小川に返すなどの一連のかかわりを通して、生命の不思議を感じたり、慈しみの気持ちを抱いたりというさまざまな気持ちが芽生えていくようです。小川における子どもたちの様子を観察していると、5領域にわたる全人格的な発達に影響を与えているようにさえ、思うのです。

小川の周りには、クラスや学年の垣根なく、子どもたちの姿がいつも見られるようになった。

手製の釣りざおで、魚釣りにチャレンジ。

保育者の差し出すザリガニにおそるおそるふれてみる。



「氷が張ったよ!」生き物の姿が少なくなった冬には、また違う楽しみが。

※このページでは、「いつでも自然とふれあえる園庭」を目指して、保護者と子どもと保育者で園庭改造に乗り出した東京ゆりかご幼稚園の実践を、1年間ご紹介します。来月は「園庭に木を植える」です。

写真協力＝東京ゆりかご幼稚園

イマジネーションを膨らませる
風を体で感じよう

目に見えない「風」をあそびのなかに取り入れてみましょう。子どもたちのイマジネーションが大きく膨らんでいきます。

執筆＝東京ゆりかご幼稚園（東京都）

たこ揚げは、子どもの心に「風」を強く意識させるきっかけになる。

風は何色？ どんなにおい？

風といえば、触覚と聴覚で感じることが主ですが、子どもたちはほかの五感でも感じているのではないか？　と考え、「風は何色？　どんなにおい?」という宿題を冬休みに出しました。すると、始業式でさまざまな答えが飛び出しました。

- ●色 …… 水色、白、緑、赤
- ●におい …… 冷たいにおい（季節によって違う）、ドングリ、ブドウ、リンゴ
- ●その他 …… 痛い（寒さ、冷たさ）、細長い、ぐるぐる

※戸外によく出掛けた子どものほうが、風にはさまざまなイメージをもったようです。また、園歌の歌詞内に「緑の風が……」という部分があり、そこから理性的認識をして「緑」色と答えた子もいたようです。

子どもたちは、生活やあそびのなかで風を感じていますが、意識しているわけではありません。今回のような質問や、また台風などの機会をとらえて意識化していくことで、抽象的なものが具体的になり、日々当たり前に起きる自然現象に目を向けることができ、興味・関心への扉が開かれるのではないでしょうか。

普段のあそびのなかでも、子どもは風の存在を感じている。

シャボン玉あそびでは、風の複雑な動きを感じられる。

風とあそぶ

さらに、子どもにとってよりわかりやすく風を体感できるのは、たこ揚げです。毎年、正月に行うたこ揚げで、何度も糸の端を持って走り、ついに舞い上がったたこを振り返って確認したときの子どもの喜びと感動は、大きくなっても忘れられないものでしょう。風をとらえて大空高く舞うたこをコントロールできたときの充実感は、自然あそびの醍醐（だいご）味です。

子どもたちはたこ揚げの経験から、いろいろな物を飛ばしてみようとします。小さなレジ袋や45Lの大きめのポリ袋などを使い、どうしたら風を袋いっぱいに入れられるか、糸の結び目を変えたり、風向きを考えたりして、大小さまざまな風をとらえようとします。

どうしたら、風をポリ袋でとらえられるか、子どもたちは試行錯誤を繰り返す。

ダイナミックに風をとらえる

もっと大きな物に挑戦してみようと思ったら、身近な物ではブルーシートがお勧め。角をひもで結んで巨大なたこの完成です。少し風がある日に試すと、子ども7～8人でも引っ張られてしまい、たこを揚げるのとは全く違う感触を味わえます。

さらにお勧めは、プレイバルーン（パラバルーン）を使ってみること。プレイバルーンは運動会の演技種目でよく使われますが、パラシュートあそびでも楽しみましょう。運動会で使っている物でもよいのですが、使い古して少し破けた物をとっておくと、気軽に思いきりあそべます。少し風がある日をねらって、大勢で綱引きをする要領で引っ張ってみると、想像をはるかに超える風の力が感じられます。大人相手の綱引きとは全然違う容赦のなさに、子どもたちの顔色も変わります。友達と力を合わせながら、五感を使ってあそぶ幼少期の原体験のなかで、自然の強大さを感じ取ってほしいと思っています。

※本当に飛ばされてしまうのでは……と心配な場合、プレイバルーンのひもを木に結んでおくと安心。

たこよりも風を受ける面積の大きいブルーシート。

大きなプレイバルーンを引っ張るのは、大人でも大変。

風の力をほかの力に変えて。園庭の小川に空気を送る装置には風力を使っている。

大地とそれをとり囲むものとのかかわり

幼児の自然教育論や環境教育論に詳しい山内昭道（東京家政大学名誉教授）は、子どもが身近な自然とかかわるとき、3つの流れがはぐくまれるとしています。①自然から感じとる流れ（よく感じる心）②自然を生活やあそびのためのもとして扱う流れ（よく動く手と体）③自然について考える流れ（よく働く頭）。これらは別々のものではなく、連続したり複合したりしながら、流れを深め、「自然を愛護する人間の形成」につながっていくのです。風は見えないけれど、体感することができます。見えないからこそ想像が膨らみ、あそびが豊かになっていきます。この一連の流れが、知識だけで「知る」ことの何倍もの力で子どもたちの心・体・頭をはぐくんでいるのです！　（大澤 力）